



# 和太鼓と弁護士の 共通点

会員 光野 真純 (66期)



### 1 江戸の華・白梅太鼓

湯島天満宮白梅太鼓保存会は、女性ばかり20名程度の艶やかで粋な和太鼓集団である。

お祭りはもちろん、国内外を問わずイベントやパーティでの演奏を行っており、以前、司法修習クラス同窓会のパーティでの演奏を行ったこともある。東京オリンピック招致フィルムでも東京の素晴らしいものの一つとして取り上げられており、白梅太鼓は私の誇りである。

### 2 女は度胸

私は、舞台に立たせてもらえるようになってすぐの頃、失敗を恐れてばかりいた。

ある日、演目が始まって数秒、私一人が全体の音頭を取る部分で、ばち同士が接触してしまった。余裕をもって演奏していれば特段問題は生じなかったのかもしれないが、落としてはいけないとしっかり持ちすぎた私のばちは、少しの接触で手から離れ、ころころとどこかへ行ってしまった。

演奏は「レーン」、ばちは一本、頭は真っ白。どうすることもできなかった。

そんな中、チームリーダーが私のパートを代わりに演奏しはじめ、他のメンバーもこれに臨機応変に対応してくれ、事なきを得た。

それ以降、私一人が失敗してもどうにかなる、そう思ったら演奏に余裕が出て、失敗することも少なくなり、気づけば先輩から「真純ちゃんはばち落とさないね～」と言われるようになっていた。今だったら、笑顔で切り抜けられるかもしれないと思う。

仲間を信じて思いきりやる。仲間を信頼する大切さと度胸が身についた。

### 3 自己満足では意味がない

失敗を恐れなくなった私のテーマは「思い切りやる」。迫力ある太鼓を目指し、力いっぱい演奏していた。

失敗することもなく、最後まで力いっぱいできたと満足していた演奏後、会長に「今日の真純の太鼓、何あれ。最悪」と言われた。理由を聞くと、「力が入りすぎていて、見ているだけで苦しいし、顔も怖いし、全然楽しそうじゃない」とのことだった。

確かにそうである。私は、「頑張る」ということが目標になっていて、自分がどう見られているか、自分がどんなふうに演奏しているのか考えることなく演奏していた。ただの自己満足に浸っていたのである。

自己満足ではなく、客観的に見たらどう見えるのか、今自分は何を求められているのか、それを考えながら演奏することで毎回新たな反省点や改善点を見つけられるようになった。見つけたからと言ってすぐには改善できないのであるが、改善点に気づく大切さを知った。

### 4 職人技

太鼓の演奏において、構成は決まっているものの楽譜もなく、各々の振り付けも特段決っていない。

先輩の太鼓を見て覚えて、「お、カッコいい」と思ったらこっそり練習する。何度も繰り返して改良を重ね、不安なところやよりよくできそうなポイントを先輩に聞く。後輩ができたなら、後輩にアドバイスする。

この一連の流れは弁護士業務に共通するところがあると思う。

「正解」が決まっているわけではなく、いいな、と思う先輩をよく見て、真似する。はじめはうまくできなくても、がむしゃらにやったらいつか身になる。

そう信じて、太鼓も弁護士も続けたい。